

| | | | |
|---|--|----|-------|
| 京都大学 | 博士（文学） | 氏名 | 須藤 英幸 |
| 論文題目 | アウグスティヌスの聖書解釈学における記号理論と言語理論 —— <i>De magistro</i> から <i>De doctrina christiana</i> への展開—— | | |
| （論文内容の要旨） | | | |
| <p>一 問題と方法</p> <p>アウグスティヌス（354～430年）の初期著作群（386～390年）と独特の実存的表現を含む中期の『告白』<i>Confessiones</i>（397～401年）との間には、明らかな文学的アプローチの相違性が認められる。直観的に把握され得るこの文学表現的相違は、思想的に如何に説明され得るのか。彼を取り巻く状況的な視点から言えば、アウグスティヌスが391年にヒッポの司祭に叙階されて以来、劇的に変化したSitz im Lebenにおいて行われた一連の聖書研究の直後に、『告白』は忽然と現れる文学作品であるが、このような『告白』へ至る道は、如何なる神学的土台に支持され得るのか。この問いが、背後から本研究を動かす動機である。</p> <p>司祭叙階直後のアウグスティヌスにとって急がれた仕事は、説教者として聖書を深く理解することであった。やがて、その努力が聖書解釈の方法の発見へ繋がっていく。司祭としてアウグスティヌスはマニ教やドナティストとの論戦を繰り広げる一方で、聖書注解にも勢力を注ぐ。392年頃から、『詩編の講解』や『逐語解釈による創世記、未完本』などの旧約聖書の研究に取り組み、他方で、394年頃から、『使徒のローマ人への手紙諸論題の注解』、『ガラテヤ人への手紙の注解』、『ローマ人への手紙の未完注解』、『シンプリキアヌスへ』（396年）と続くパウロ書簡の研究に集中的に取り組む。その後、直ちに執筆された『キリスト教の教え』第1～3巻（396／397年）において論じられるのが、聖書解釈の方法、すなわち、聖書解釈学である。『キリスト教の教え』と同様に、言葉を記号と捉える『教師論』<i>De magistro</i>（389／390年）の後半部分で、「記号によっては何も学ばれない」ことが主張されるのに対し、『キリスト教の教え』<i>De doctrina christiana</i>第一巻の冒頭付近では、「事柄は記号を通して学ばれる」と宣言される。これらの主張の矛盾は、如何に理解され得るのか。このような、記号や言葉によって知識の伝達が可能であるかの否かという言葉の媒介性問題が、本研究における直接的な問いである。</p> <p>本研究の目的は、言語的媒介性における相違が『教師論』の「記号によっては何も学ばれない」と『キリスト教の教え』の「事柄は記号を通して学ばれる」との間に見出されるという立場に立ち、言葉の媒介性問題に対する解決方法を探ることを通じて、アウグスティヌスの聖書解釈学における記号理論と言語理論、及び、『キリスト教の教え』の聖書解釈学に関する学問的な理解を一層前進させることにある。</p> <p>本研究の方法は、アウグスティヌスの記号と言語に関する研究において徐々に明らかにされた二つの特徴に立脚する。すなわち、アウグスティヌスの言語的記号において、記号理論的な側面と言語理論的な側面とが見出されること、及び、受信型記号（聞き手が受け取る記号）の特性と発信型記号（話し手が口述する記号）のそれが相</p> | | | |

違することである。

研究史的には、『教師論』と『キリスト教の教え』とにおける言語的記号に関して、C・マイヤーはアウグスティヌスの「記号理論」に変化は見られないと述べ、U・ドゥフロウは「言語理論」の発展的相違性を主張し、L・フェレッターは記号理論を凌駕する言語理論を『三位一体論』に見出し、それが『キリスト教の教え』にも萌芽的に含まれることを暗示する。他方で、ドゥフロウは言語理論が「受信すること」と「伝達すること」から理解される可能性を述べ、M・D・ジョーダンを受肉に基礎付けられた「表現的記号」に注目し、フェレッターは「話し手の口述」と「聞き手の学び」が異なる過程であることを主張する。さらに、C・カーワンは<記号—事柄>関係の視点からは記号群が「言葉群」wordsと捉えられ、<記号—思考>関係の視点からは記号群が「文章群」sentencesと理解されることを示唆する。

以上の諸研究を基礎に、本研究では、単語単位が問題とされるアウグスティヌスの指示関係<記号—事柄>に関する言語的記号の分野を「記号理論」と規定し、更に、文章単位が問題とされる口述関係<思考—記号>に関する記号的言語の分野を「言語理論」と規定する。

二 各部の概説

この枠組みの下で、本論文第I部で「アウグスティヌスの記号理論」が、第II部で「アウグスティヌスの言語理論」がそれぞれ扱われる。第I部では、第一に（第1章）、『教師論』における認識理論を概括し、第二に（第2章）、『問答法』で展開されるアウグスティヌスの記号理論がストア学派の記号論と言語論との総合であることを論じ、第三に（第3章）、『キリスト教の教え』における記号理論の三項構造を探求することを通して、マイヤーが主張するように、アウグスティヌスの記号理論に一貫性が保持されることを明示したい。

加藤は、388～396年の間にアウグスティヌスが思想的な「一つの回転」を経験したであろうことを主張する。他方、バーンズは、『キリスト教の教え』における聖書解釈学が『シンプリキアヌスへ』の回心構造における「相応しい呼びかけ」に見受けられる思想的転換の影響を受けていることを主張する。本研究では、『教師論』から『キリスト教の教え』へ至る思想的展開がアウグスティヌスの言語理論に属するものであると捉え、その原因と思われる思想的転換が『シンプリキアヌスへ』の回心構造における「相応しい呼びかけ」概念の発見に見出され得るという立場に立つ。

この仮説的見通しの下で、第II部では、『教師論』から『キリスト教の教え』へ至る言語理論的な展開が辿られ、『シンプリキアヌスへ』における思想的転換が如何に『キリスト教の教え』に影響しているのかが探求される。第一に（第4章）、『教師論』の主題が「記号によっては何も学ばれない」ことであることを確認し、それが『キリスト教の教え』から『三位一体論』へ連なるところの受肉に基づく言語理論と明確に相違することを明らかにし、第二に（第5章）、『シンプリキアヌスへ』の回心構造における恩恵概念の転換を突き止め、その『キリスト教の教え』序論との連続性を探究する。その結果、『教師論』と『キリスト教の教え』とにおける言語理論は

互いに相違し、その原因が『シンプリキアヌスへ』におけるアウグスティヌス特有の恩恵概念の発見にあることを明示したい。

第III部では、『キリスト教の教え』の聖書解釈学そのものが扱われる。第一に（第7章）、『キリスト教の教え』では解釈のクライテリアに即さないものは比喩的に解釈されなければならないと考えられているが、解釈のクライテリア、すなわち、「神と隣人を愛すること」及び「神と隣人を知ること」とキリスト教共同体との関係性を探究し、第二に（第8章）、「知恵」sapientiaの最高段階へ進む生の七段階の展開において、主に「知識」scientiaの第三段階に属すると思われてきた聖書解釈の役割、すなわち、聖書言語の媒介的役割が生進展に如何に作用するのかを探求する。その結果、『キリスト教の教え』の聖書解釈学における言語理論と彼のSitz im Lebenとの関係性、及び、聖書言語における解釈行為が生進展に作用する本質的な重要性を明示したい。

三 各部の結論

研究の結果、次の結論を得た。第I部の「アウグスティヌスの記号理論」では、第一に（第1章）、『教師論』における記号は単語単位に属し、その記号理論は〈記号・事柄・口述可能なものdicibile〉という三項構造を有し、一方で、〈事柄—口述可能なもの〉という認識関係は内的真理により保証されるが、他方で、〈口述可能なもの—記号〉という口述関係を保証するものは『教師論』で提示されない。第二に（第2章）、ストア学派の記号論は「言語的記号」と本来的な「推論的記号」とに分類され、一方、言語論は「指示するもの」と「指示されるもの」、すなわち、「音声」と「口述されうるもの」λεκτόνとの対概念で構成され、更に、意味の担い手は「主張文」とされる。これに対して、アウグスティヌスは、『問答法』において意味の担い手を単語単位に移し、ストア学派の「推論的記号」における指示作用を言語に導入することで、彼独自の言語の記号理論を創設する。第三に（第3章）、『キリスト教の教え』における記号理論は〈記号・事柄・思考上の何か〉という三項構造を有し、受信型記号は指示関係〈記号→事柄〉に関連する記号理論から、発信型記号は口述関係〈思考→音声〉に関連する言語理論からそれぞれ説明され、口述関係〈内的言葉→音声〉が〈神の言葉→キリストの受肉〉という受肉理論に基礎付けられることが確認される。

以上より、『教師論』と『キリスト教の教え』における記号理論の三項構造において、本質的相違は認められず、アウグスティヌスの記号理論における一貫性が確認された。他方、『教師論』で認識関係〈事柄—口述可能なもの〉が内的真理であるキリストによって保証されるのに対し、『キリスト教の教え』では口述関係〈思考—音声〉が受肉の神学によって初めて明示的に基礎付けられた。

第II部の「アウグスティヌスの言語理論」では、第一に（第4章）、『教師論』で主張されるところの内的真理を基準とする理性主義的方法は論理的命題を解決するものの、歴史性を含む主張的命題には対応できず、したがって、内的真理の直視を目指す直観的論証は包括的な魂の動きに支えられる言説的論証を最終的に否定し、この点

で、「記号によっては何も学ばれない」ことが『教師論』の主題として確認される。また、『キリスト教の教え』における〈心に保持する言葉—音声〉関係が、〈神の言葉—受肉のキリスト〉関係との類似性に基づき、前者の关系的確実性が暗示され、「事柄は記号を通して学ばれる」ことが確認される。『三位一体論』でも、『キリスト教の教え』と同様に、音声と受肉のキリストとの類似性により言説的論証が確保されている。第二に（第5章）、『シンプリキアヌスへ』第1巻第2問における回心構造は恩恵的な「相応しい呼びかけ」概念に基礎付けられ、神の「相応しい呼びかけ」は人間の主体性と意志の自由とを確保しつつ働くことが結論付けられる。『キリスト教の教え』では「人間を通して」学び合い伝授し合うことの重要性が主張され、それは『シンプリキアヌスへ』で確立された言語理論における彼独自の恩恵概念が前提とされる。加えて、『キリスト教の教え』における伝達可能な口述内容に、知覚内容や理解内容だけでなく、魂の動きとしての「愛」と「喜び」が含まれるようになるのも、『シンプリキアヌスへ』の影響と考えられる。

以上より、『キリスト教の教え』で口述関係〈内的言葉→音声〉が神学的に受肉のキリストから捉え直され、その直前に執筆された『シンプリキアヌスへ』では言葉による知識の伝達可能性が心理学的に「喜び」を契機に考えられており、『キリスト教の教え』で主張され、心理学的に支えられた言説的論証はそれ以降も基本的に堅持される。そして、『三位一体論』では、受肉の神学に基礎付けられた〈内的言葉→外的言葉〉の関係性と、心理学的な喜びに支えられた言葉による知識伝達が明確に結び付けられ、共時的関係として捉えられる。したがって、『シンプリキアヌスへ』における恩恵的な「相応しい呼びかけ」概念の発見が、アウグスティヌスの言語理論的な発展に大きく貢献していることは確かで、『キリスト教の教え』における「事柄は記号を通して学ばれる」という言説的論証の主張に『シンプリキアヌスへ』の影響を見取ることができる。

第III部の「『キリスト教の教え』における聖書解釈学」では、第一に（第6章）、「神と隣人への愛」と「神と隣人への知」という解釈のクライテリアによって比喩的解釈の適用箇所が特定されるのであるが、解釈のクライテリアはキリスト教共同体が理想とする霊的なリアリティーそのものであり、共同体における聖書解釈の役割は魂の交流を促す倫理的な働きとして捉えられる。また、『キリスト教の教え』における聖書解釈学の中心点は転義的な多義記号の解釈にあるが、アウグスティヌスは単語レベルの選別的な比喩的解釈を通して、比喩の「喜び」を契機に、「事柄」の理解における深まりと愛の実践へ人々を動かそうとする。第二に（第7章）、聖書解釈は生の展開の七段階における第三段階の「知識」であると見なされてきたが、聖書の「理解」intellectusは字義的解釈による「知識」以上のものであり、最終段階にある終末的な「知恵」を垣間見せる比喩的解釈を通して、「神と隣人への愛」へ読者を動かす効力を有する。字義的解釈では「悲嘆」が、また、比喩的解釈では恩恵的要素を強く含む「喜び」が生の停滞を克服するための原動力と見なされる。

以上より、新プラトン主義に強く影響されるミラノサークル（アンブロシウスやシ

ンプリキアヌスが属する)の一員からカルタゴの司祭へ変遷したことによる、Sitz im Lebenの変化に伴って考えられるようになった言葉の媒介的可能性は、教養教科的な理性的視点からでなく、心理学的・神学的視点から共同体を基軸として主張されたのである。『キリスト教の教え』における比喩的解釈による「喜び」の効力は、『シンプリキアヌスへ』で発見された回心構造における「喜び」の心理学的効力に基礎付けられ、『キリスト教の教え』で初めて明言される音声の受肉理解は、聖書的証言に端的に依存する。したがって、『シンプリキアヌスへ』で見出されたところの比喩的解釈による倫理的な原動力としての喜び概念は、『キリスト教の教え』において、キリスト教共同体が目的とする「神と隣人への愛」へ強力に促す推進力として、聖書言語の解釈学に導入されたのである。

四 結論

初期著作群で追求された神探求の方法としての内的真理の直視による理解は、『キリスト教の教え』の聖書解釈学では終末的理想として捉え直され、代わって、愛と喜びに動機付けられた言説的言語を通じた理解が実質的に主張される。『告白』で見出される、実存的人間の現実的状况を神の下に吐露し尽くすような祈りにも似たアウグスティヌスの口述表現は、『シンプリキアヌスへ』で発見された回心構造の恩恵概念と、『キリスト教の教え』で主張された愛と喜びによる聖書言語の比喩的解釈とに基礎付けられていると言える。アウグスティヌスは、言葉を内的深みの次元から汲み上げれば汲み上げるほど、神の恩恵が言葉において読者に働き、それゆえ、彼の意志が読者の喜びとなって伝達され、その結果、心動かされる読者は恩恵的に神の愛を理解するに至り得る。『キリスト教の教え』において、彼はこのような言葉の媒介的可能性を言葉において働く神の恩恵概念として発見したのである。

(論文審査の結果の要旨)

アウグスティヌスはキリスト教世界最大の思想家の一人であり、その思想的意義については改めて指摘するまでもないであろう。キリスト教思想研究の分野においても、アウグスティヌスはこれまで多様な問題連関とテーマにおいて、またさまざまな方法論を用いて繰り返し研究され、現在に至っている。アウグスティヌスについて論じるべき研究テーマは多岐にわたるが、その中でも、人間の自由と神の恩恵、罪と意志という諸問題は、キリスト教思想家アウグスティヌスにとって中心的な位置を占めている。

本論文は、このアウグスティヌスの中心的な問題に、最近研究が大きく進展しつつある言語・記号理論と聖書解釈学という視点から迫るものであり、多くの先行研究をその内容に立ち入って批判的に検討しつつ、アウグスティヌスの一次文献の掘り下げた読解を目指している。また、古代哲学と古代キリスト教思想という思想史的な文脈にアウグスティヌスを位置づけることによって、これらの文脈におけるアウグスティヌスの独自性を明らかにし、アウグスティヌスの思想展開を新たな視点から一貫して描くことを試みている。これらの点で、本研究は現代のアウグスティヌス研究の進展に寄与するものとして評価することができる。さらに問いが明確に立てられ、明晰な議論が行われていることは、本論文の優れた特徴と言える。

本論文は、それぞれが複数の章を含む三部から構成されているが、初期から中期にかけてのアウグスティヌスの思想展開について、『教師論』から『キリスト教の教え』に至る記号・言語理論の発展（第一、二部）と、『シンプリキアヌスへ』に示された回心構造における恩恵概念の転換（第二部）という二つの思索の線がそれぞれ詳細に辿られた上で、それらが聖書解釈学において相互に緊密に結び付けられていることが説得的に論じられている（第三部）。これによって、聖書解釈は言語的記号論的な理論の事柄であるだけでなく、キリスト教的生の事柄であるということ、そこにおいては共同体的場が重要な位置を占めることなどが明らかにされた。これは、現代のキリスト教思想にとっても重要な議論である。

以下、本論文の注目すべき多くの成果の中より、その主要なものについて指摘してみたい。

まず第一部と第二部前半では、初期の著作『教師論』『問答法』における記号理論が、アリストテレスとストア派の記号理論に依拠しつつも、「記号・事柄・口述可能なもの」という独自の三項構造を有すること、また中期の著作『キリスト教の教え』では、この三項構造を保持しつつも、受信型記号と発信型記号の二種の記号に即した理論の展開がなされ、さらにそれが神学的な見地から受肉関係に基礎づけられていることが明らかにされた。これによって、「記号によっては何も学ばれない」（『教師論』）から「事柄は記号を通して学ばれる」（『キリスト教の教え』）への思索の展開について明確な理解が可能になった。

続く第二部後半では、初期から中期への思索の展開が、『ローマ人への手紙諸論

題の註解』『自由意志論』から、『シンプリキアヌスへ』における「相応しい呼びかけ」を核心とした回心構造あるいは恩恵概念の理解への転換として詳細に論じられた上で、これが先の記号・言語理論における展開と緊密な相互連関にあることが明らかにされた。この二つの思索の線が相互に結びつけられることによって、アウグスティヌスの思想展開はいわば立体的に理解可能なものとなった。

最後の第三部では、これまで議論されてきたアウグスティヌスの思索が聖書解釈学に集約されることが論じられた。アウグスティヌスの聖書解釈学の中心問題は、多義的言語の理解、字義的解釈と比喩的解釈の区別をめぐるものであるが、論者は、解釈のクライテリアが、神と隣人に対する愛と理解に関わる点に注目することによって、聖書解釈が生の七段階の第三の段階を超えてそれ以降の諸段階に及ぶものであること、また聖書解釈が共同体における学び合いの対話的關係に固有の場をもつことを説得的に示した。

以上のアウグスティヌスの思想展開の分析より、古代キリスト教会におけるプラトニズムとキリスト教的思惟の総合という思想的課題が、アウグスティヌスにおいて、理想主義的人間像から対話論的共同体的人間像への展開として遂行され、それが、アウグスティヌス自身の歴史的な生の場 (Sitz im Leben) に相関したものであったことが明らかになった。

以上のように、本論文において示された研究成果はいずれもアウグスティヌス研究に大きく貢献するものであるが、若干の改善の余地がないわけではない。たとえば、アウグスティヌスの聖書解釈学を具体的な説教や聖書註解に即して検証するという問題は将来的な研究課題として残されている。また、本論文が提示した重要な論点についても、それぞれの論点の内実や相互連関に関して、議論の掘り下げ不足や不明瞭な点が指摘されねばならない。しかし、これらの問題点については論者自身十分に自覚しており、今後の研究の進展の中で解決することが期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年4月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。